

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12364

研究課題名(和文)人称標示・人称標識に注目したアルタイ諸言語の機能的類型論

研究課題名(英文)A functional typology of Altaic languages focusing on person marking and person markers

研究代表者

児倉 徳和(Norikazu, Kogura)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：70597757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：義務的に人称標示がされる統語的人称標示型言語である現代ウイグル語と、人称標示が義務的でなく、人称標示が他の意味機能を担っている機能的人称標示型の言語のシベ語について、定動詞・形動詞述語・動名詞述語・補助動詞/コピュラ動詞・文末詞の意味機能の分析と対照を行うことで両タイプの言語の文法範疇の発展過程の解明を目指した。そして統語的人称標示型言語と機能的人称標示型言語で異なるのは専ら定動詞・形動詞・動名詞という動詞の屈折形式の意味機能のみであり、コピュラ動詞/補助動詞と文末詞は両言語で共通した意味機能を持ち、共通した範疇を形成していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)人称変化の出現/消失という言語変化について、その具体的なプロセスを述部を構成する文法カテゴリ全体の意味分析を通して明らかにすることにより、一般的に文法体系において人称標示がどのような位置を占めるのかという問いの解明に繋がる。

(2)基本語順や形態構造において日本語に近い点で注目されるアルタイ諸言語の研究が、日本語の文法的特徴の解明のためのデータの供給に繋がると同時に、日本語や日本語以外の言語についての社会的な理解の向上に繋がる。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to analyze and contrast the semantic functions of (1) finite verb and participle predicates, (2) verbal noun predicates, (3) auxiliary/copula verbs, and (4) sentence-final verbs in Modern Uyghur, a syntactic personal marking type language, and in Sibe, a functional personal marking type language where personal marking is not obligatory and personal marking takes on other semantic functions. The aim of this study was to elucidate the development of the grammatical categories of the two types of languages. The results show that syntactic and functional personal marking languages differ only in the semantic function of the inflectional forms of verbs (finite verbs, participles, and verbal nouns), and that copula/auxiliary verbs and sentence-final particles have a common semantic function and form a common category in both languages.

研究分野：記述言語学

キーワード：シベ語 現代ウイグル語 トゥヴァ語 日本語 証拠性 自己性 意外性 文末詞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アルタイ諸言語はチュルク諸語・モンゴル諸語・ツングース諸語からなる言語群である。アルタイ諸言語はロシア東部から中国東北部・西北部、モンゴル、中央アジアからトルコに至る広大な地域に分布している。アルタイ諸言語はSOV語順、膠着的形態構造、後置詞優位といった文法的特徴を共有しているが、一方で言語ごとに異なる文法的特徴も少なくない。本研究課題で注目する人称標示もその一つである。

アルタイ諸言語の一部の言語は、「私の父」のような「所有者+所有物」の意味構造をもつ名詞句において主名詞となる所有者について所有者の人称を標示する所有接辞と、動詞句の述語動詞について主語の人称を標示する主語人称接辞をもつ。典型的な所有者および主語の人称標示は義務的に行われる。アルタイ諸言語の一部ではこのような所有者と主語の人称標示が義務的に行われるが、所有者と主語の義務的な人称標示をもたない言語も存在する。さらに、後者の言語の中には、通時的に人称標示に起源をもつ形式を共時的に主題標識や断定のモダリティの機能的標識として用いているものも存在する。

義務的な人称標示を行う言語と、通時的に人称標示に由来する形式を共時的に他の機能的な標識として用いる言語は例えばツングース諸語におけるソロン語とシベ語のように、同一の系統の言語の中にも見られるため、両者の類型がどのようにして生じたかを解明する必要がある。

2. 研究の目的

本研究課題では、アルタイ諸言語(ツングース諸語・モンゴル諸語・チュルク諸語)を統語的人称型言語(所有者の人称と主語の人称が統語的に標示される言語)と機能的人称型言語(統語的人称型言語の所有者人称標識や主語人称標識に形式的に対応する文法形式をもつが、人称の標識としてではなく、主題やモダリティなど機能的な標識として用いられる言語)という類型に分類し、両類型の比較対照を行う。本研究課題の第一の目的は、アルタイ諸言語における両類型の成立の過程を明らかにすることであるが、より一般的には、所有者や主語の標識といった主要部標示の性質をもつ言語とそうでない言語の文法システムの差異と両者の間の変化の過程を明らかにすること、また、特に所有者人称標識が主題標識に変化しているという現象をもとに、主語人称標示を行う主語卓立的の性質をもつ言語が主題標示をもとに主題卓立の特徴を獲得する過程を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究課題では、統語的人称標示型の言語として主に現代ウイグル語とトゥヴァ語、機能的人称型言語としてシベ語を選び、両タイプの言語において文の述部の構造がどのように形成されているかに特に注目して研究を行った。

調査データは主に母語話者に対するエリシテーション調査により採録したデータと、トゥヴァ語については語り(narrative)のデータも使用して分析を行った。エリシテーション調査は新型コロナウイルス(Covid-19)の感染拡大およびそれに伴う移動の制限のため、主にZoomを利用して行った。

4. 研究成果

機能的人称標示型の言語のシベ語と、統語的人称標示型言語のうち現代ウイグル語を中心にモダリティ(特に証拠性 *evidentiality*・自己性 *egophoricity*・意外性 *mirativity*)体系の対照を行い、両言語の言語の共通点と相違点を明らかにすることを通して両類型の発生、特にシベ語の機能的人称標示型の特徴がどのような言語変化を経て成立したかという点について解明を進めた。そして、両類型の言語で定動詞と形動詞(ここではそれぞれ、もっぱら主節の述部にのみ現れる形式と、名詞修飾が可能な形式と定義する)という動詞の屈折形式がモダリティを担っていること、統語的人称標示型の言語においても、機能的人称標示型と同様のモダリティ範疇が人称標示と独立に存在することを明らかにした。本研究課題の成果は以下のようにまとめられる。

(1)モダリティ体系の分析と記述

シベ語において節の述部を構成する諸形式の機能をモダリティ(特に証拠性、自己性と意外性)の観点からまとめ、論文として公表した。

統語的人称標示型言語である現代ウイグル語について、モダリティ(特に証拠性、自己性と意外性)に関わるコピュラ動詞 *i-* と文末詞 *dA*, *ghu* の機能の分析を行い、コピュラ動詞が話し手が発話時においてすでに有していた知識と発話時に新たに得た情報の区別を表し、文末詞が

それら相互の関係(矛盾しているかしていないか)を表すというように現代ウイグル語において節の述部を構成するを諸形式の機能を体系的にまとめ、論文として公表した。

シベ語と現代ウイグル語における定動詞述語と形動詞述語の機能の対照を意外性を表す形式の意味分析を中心に行った。

さらに統語的人称標示型言語であるトゥヴァ語(チュルク諸語)について、談話資料を採録し、定動詞述語と形動詞述語の使い分けについて主観性と自己性の観点から分析を行った。

(2)定動詞・形動詞述語の意味機能

共時的には統語的な人称標示を持たないシベ語について、節の定性(finiteness)とその通時的な変化について検討した。そして、現代のシベ語においては一般に名詞修飾節や名詞節の非定型節(non-finite clauses)を構成する動詞の形式も定形(finite form)といえる一定の特徴を持つこと、また歴史的には専ら定型節(finite clauses)のみ形成する、理論的に定形とされる形式(finite form)は存在せず、主節だけでなく名詞修飾節や名詞節も構成可能な、非定形とされる形式のみが主節を形成したと論じ、論文として公表した。

シベ語の定動詞述語に見られる2種類のアクセントパターンの成立過程を検討し、定動詞を形成する要素がホストの形成するアクセント単位に取り込まれる、という通時の変化が存在すると結論付け、論文として公表した。

シベ語では共時的には動詞語幹単独の形式が命令の機能を持つ(語幹命令形)が、他のツングース諸語の少なくとも一部では命令形は直説法の一部に位置づけられ、語幹単独の形式は命令の機能を持たない。この差異の形成について検討を行い、シベ語の語幹命令形は形動詞(分詞)と共通する機能をもっており、さらに動詞語幹によっては歴史的に形動詞であった形式が共時的には(不規則な)語幹として用いられる場合もあることから、現代のシベ語における語幹命令形は歴史的には形動詞から発展したものであるとした。

(3)動名詞述語の意味機能

動名詞述語(ここでは、単独で名詞節を形成するが名詞修飾の機能を持たない動詞の形式を動名詞とする)はシベ語では主節の述部に用いられるものの、現代ウイグル語においては動名詞述語は主節の述部には一般に用いられないことが明らかとなった。なお、シベ語では動名詞述語は話し手が命題内容を確信をもって知っていることを表すが、この意味機能は現代ウイグル語では定動詞述語によって表されていることが明らかとなった。

義務的な述語の人称標示を持たない点でシベ語と共通する日本語とシベ語の両言語における動名詞述語(日本語「~の(だ)」)の対照を行い、日本語の動名詞述語が、話し手が確信をもって知っている命題だけでなく発話時まで知らなかった命題(いわゆる発見の「の(だ)」)の両方に用いられるのに対し、シベ語の動名詞述語は話し手が確信をもって知っている命題にしか使われないという差異が存在することを明らかにした。そして、この差異が、シベ語には日本語の「だ」に相当するコピュラ形式が存在しないという特徴によるという仮説を提案した。

(4)補助動詞/コピュラ動詞の意味機能

シベ語と現代ウイグル語は共に他の動詞に後続する補助動詞 bi- / i- (現代ウイグル語の研究ではコピュラと分析される)の屈折形式により意外性が表されるという共通点を持つが、一方でシベ語では定動詞の形式(bixe=i)が用いられるのに対し現代ウイグル語では形動詞の形式(ikAn)が用いられるという違いがある。この点を踏まえ、両形式において意外性を表す形式の意味機能の構成的分析を行い、両言語において補助動詞/コピュラ動詞の意味機能は共通して「話し手が文の命題内容に確信を持っているか」という話し手の知識の状態を表すことを明らかにした。

(4)文末詞の意味機能

現代ウイグル語について、文末詞の意味機能の分析を文末詞 dA, ghuを中心に行い、それぞれ文の命題内容が話し手の知識と一貫する/一貫しないという意味機能を持ち、これらの文末詞が文の命題内容と話し手の知識と一貫する/一貫しないか、という範疇を形成することを明らかにし、論文として公表した。

シベ語について、従来注目されてこなかった文末詞 lyangge の意味機能の分析を行い、シベ語についても現代ウイグル語と同様に文の命題内容と話し手の知識と一貫する/一貫しないか、と

いう範疇が文末詞により形成されていることを明らかにした。

(5) テンス・アスペクト体系

統語的人称標示型言語と機能的人称標示型においてモダリティとテンス・アスペクトの意味的分化に違いがあるかを調べるため、前者に分類される現代ウイグル語・トゥヴァ語と、後者に分類されるシベ語について、語り(narrative)のテキストにおける諸文法形式の出現について調査を行った。そして結論として、いずれの言語においてもテンス・アスペクト形式は語りのイベントの時点を基準に選択され、語りの時点を基準としたテンス・アスペクトの表示を行うのに有標の形式、特に(3)で言及した意外性を表す形式が用いられるという共通点を持つことを明らかにした。

機能的人称標示型言語であるシベ語のテンス・アスペクトとモダリティの発展過程について、進行アスペクトを表す接辞 -maXe、および補助動詞 yawe- の発展過程の検討を行った。そして、これらの要素がそれぞれダグル語から音借用した動詞語幹 a-と、カザフ語から翻訳借用された補助動詞をもとに形成され、モダリティを表す要素とは独立して発展したと結論付け、論文として公表した。

(6) その他

本研究の過程では、本研究で対象とする諸言語の談話資料の採録・整理を行いデータとして使用した。また、シベ語およびトゥヴァ語については言語資料の形で公表した。

以上をまとめると、統語的人称標示型言語(現代ウイグル語、トゥヴァ語)と機能的人称標示型言語で異なるのは専ら定動詞・形動詞・動名詞という動詞の屈折形式の意味機能のみであり、コンピュータ動詞/補助動詞と文末詞は両言語で共通した意味機能を持ち、共通した範疇を形成していること見ることが可能である。また、テンス・アスペクト体系は特にシベ語においてはモダリティ体系と独立して発展したと考えられる。そして、人称標示とのかかわりから見ると統語的人称標示型言語では人称標示とモダリティの標示は互いに独立しているとみることが可能である。このような文法特徴は Kogura(2015) が提案する、シベ語において定動詞と形動詞が語幹の再分析により二次的に形成されたという仮説に符合、定動詞と形動詞が二次的に形成された過程で異なる意味機能を獲得した可能性がある。(2)の で挙げたシベ語の定動詞と形動詞に関する研究も定動詞と形動詞の二次的な形成の可能性を支持するものである。

今後の課題としては、対象とする言語をより広げ、各言語における動詞の屈折形式の形成過程に注目しつつモダリティの体系を体系的に記述し、類型化を行うことが挙げられる。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 5件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Kogura, Norikazu | 4. 巻 N/A |
| 2. 論文標題 Evidential Categories in Modern Uyghur: The auxiliary -i and Sentence-final Particles Categories in Modern Uyghur: The auxiliary -i and Sentence-final Particles | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Aspects of Turkic Languages: Phonology, Morphosyntax and Semantics | 6. 最初と最後の頁 33-46 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Kogura, Norikazu and Arzhaana Syuryun | 4. 巻 N/A |
| 2. 論文標題 Evidentiality and perspective management in narrative discourse: A comparative study among Sibe, Modern Uyghur, and Tuvan | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Proceedings of 15th Seoul International Altaistic Conference | 6. 最初と最後の頁 389-407 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 児倉 徳和 | 4. 巻 22 |
| 2. 論文標題 シベ語の補助動詞 yawe-の機能とシベ語における テンス・アスペクト・ムード体系の発展 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) series | 6. 最初と最後の頁 43-56 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 児倉徳和 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 シベ語の文法形式の形態論的ステータス 語から接辞へ？ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 津曲敏郎先生古稀記念集 | 6. 最初と最後の頁 104-124 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Norikazu Kogura | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 Sibe Text: Dancing of Sibe People | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Northern Language Studies | 6. 最初と最後の頁 213-232 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Norikazu Kogura | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 Evidentiality in Sibe | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集 | 6. 最初と最後の頁 111-111 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Norikazu Kogura | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Information structure in Sibe: toward the unification of nominal reference and knowledge management | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Proceedings of the national conference of the Altaic Society of Korea 2020 | 6. 最初と最後の頁 111-111 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 Norikazu Kogura | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 Finiteness in Sibe: Aspects of Finiteness and Historical Development | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics | 6. 最初と最後の頁 81-112 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/92952 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Kogura Norikazu | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 On the Verbal Suffix -maXe in Sibe: The Development of Its Morphophonology and Language Contact | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Endangered Languages of Northeast Asia | 6. 最初と最後の頁 187 ~ 199 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1163/9789004503502_010 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 SYURYUN Arzhaana, KOGURA Norikazu | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 A Tuvan Text: A Journey to Tokyo 2020 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African languages and linguistics) | 6. 最初と最後の頁 329 ~ 349 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117168 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 SYURYUN Arzhaana, KOGURA Norikazu | 4. 巻 12 |
| 2. 論文標題 Tuvan Text: D0ng-H00Zuk | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 北方言語研究 (Northern Language Studies) | 6. 最初と最後の頁 245-262 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 児倉徳和 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 シベ語の通時的発展と言語接触の諸相 進行を表す要素を中心に | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 満族史研究 | 6. 最初と最後の頁 9-16 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 10件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kogura, Norikazu and Arzhaana Syuryun |
| 2. 発表標題 Evidentiality and perspective management in narrative discourse: A comparative study among Sibe, Modern Uyghur, and Tuvan |
| 3. 学会等名 15th Seoul International Altaistic Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kogura, Norikazu and Arzhaana Syuryun |
| 2. 発表標題 On the functions of evidential markers in Tuvan narrative texts |
| 3. 学会等名 日本言語学会第163回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 児倉徳和 |
| 2. 発表標題 シベ語の動詞 yawe- について |
| 3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 河西回廊モンゴル諸語3in1全文検索システム |
| 3. 学会等名 共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容：外的要因と内的要因」2020年度第2回研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Syuryun, Arzhaana; Kogura, Norikazu |
| 2. 発表標題 Subjectivity in Tuvan narratives |
| 3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 ウイグル語の発見標識 iken からみたシベ語の発見標識 biXeï |
| 3. 学会等名 言語研修シベ語フォローアップミーティング / 第9回シベ語研究会（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 シベ語動詞の諸形式から見るシベの移動と言語接触 |
| 3. 学会等名 満族史研究会第35回大会（国際学会） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kogura, Norikazu |
| 2. 発表標題 Information structure in Sibe: toward the unification of nominal reference and knowledge management |
| 3. 学会等名 The national conference of the Altaic Society of Korea 2020（国際学会） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 シベ語における情報構造再考 「焦点」を中心に |
| 3. 学会等名 日本北方言語学会第3回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 シベ語と日本語のモダリティの対照：「のだ」と「ている」を中心に |
| 3. 学会等名 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第28回研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Norikazu Kogura |
| 2. 発表標題 The development of verbal morphology in Sibe and Manchu |
| 3. 学会等名 From Literary to Vernacular: A Workshop/Symposium on Manchu-Sibe Archives and Language（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Norikazu Kogura |
| 2. 発表標題 A brief note on the development of verbal morphology in Manchu |
| 3. 学会等名 From Literary to Vernacular: A Workshop/Symposium on Manchu-Sibe Archives and Language（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Norikazu Kogura |
| 2. 発表標題 The organization of modal categories in Modern Uyghur: With a focus on the auxiliary i- and sentence-final particles |
| 3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaic Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Norikazu Kogura |
| 2. 発表標題 On the bare verbal stem forms in Sibe: Imperative of irrealis? |
| 3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaic Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 児倉 徳和 |
| 2. 発表標題 自著を語る：『シベ語のモダリティの研究』について |
| 3. 学会等名 満族史研究会第34回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 児倉徳和 |
| 2. 発表標題 現代ウイグル語の文末詞 |
| 3. 学会等名 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 児倉徳和 |
| 2. 発表標題 シベ語のいわゆる語幹命令形について |
| 3. 学会等名 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相 - 音韻・形態統語・意味の統合的研究 - 」2018年度第1回研究会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Norikazu Kogura |
| 2. 発表標題 On the sentence-final particle Iyangge in Sibe |
| 3. 学会等名 The 16th Seoul International Altaic Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Sato, Kumiko and Norikazu Kogura (eds.) | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 The Consortium for the Studies of Eurasian Languages | 5. 総ページ数 158 |
| 3. 書名 Aspects of Turkic Languages: Phonology, Morphosyntax and Semantics | |

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 李林静、山越康裕、児倉徳和、風間伸次郎、山田洋平 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 三元社 | 5. 総ページ数 256 |
| 3. 書名 中国北方危機言語のドキュメンテーション | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|-----------------------------|--|--|--|
| ロシア連邦 | Russian Academy of Sciences | | | |